

中国地方 2014 回顧

作曲家偽装問題など世間を揺るがす出来事も発覚したこの一年。中国地方では、広島市のミニシアター2館が移転や改装オープンし、広島国際映画祭も始まるなど、映画界に新たな動きが相次いだ。広島国際アニメーションフェスティバルは30周年を迎えた。広島市での大規模な土砂災害を受けて、広島交響楽団をはじめ支援の輪がアーティストにも広がった。

(余村泰樹)

音楽

広響は、昨年始めた創立50周年シリーズに続き、音楽監督・常任指揮者の秋山和慶の指揮活動50周年の記念シリーズを展開。11月の定期演奏会では、秋山がブラームスの交響曲第2番に

秋山和慶の指揮活動50周年シリーズで開催した広島交響楽団の定期演奏会。観客総立ちの拍手に包まれた(11月12日、広島市中区の広島文化学園HBGホール)



ミニシアターが奮闘

の閉館が相次ぐ中、サロンシネマは半世紀以上の歴史を刻んだ中区のタカノ橋商店街から9月に八丁堀へ移転。西区の横川シネマは10月に改装オープンするなど映画文化の多様性を維持しようとする踏ん張りが目立った。福山市のシネフク大黒座は8月末、惜しまれながら122年の歴史に幕を下ろした。

広島国際アニメーションフェスティバル(8月)は30周年を迎え、国内外のアニメーション作家が祝福した。短編映画の祭典、ダマ

3年ぶりの新作「野のなななのか」で、東日本大震災後の在り方を問うた。高倉健と菅原文太という戦後の日本映画を支えた名

復興支援の音色 力強く

あふれる情熱を乗せた。楽団員は大きく入れ替わった。コンサートマスターを10年務めた田野倉雅秋、首席客演指揮者のヘンリク・シェーファーとエバルド・ダネルが退任。コンマスには佐久間聡一と蔵川瑠美の2人が就任した。打楽器奏者の岡部亮登が日本管打楽器コンクール1位に輝くなど、楽団の確かなレベルアップを実感した。

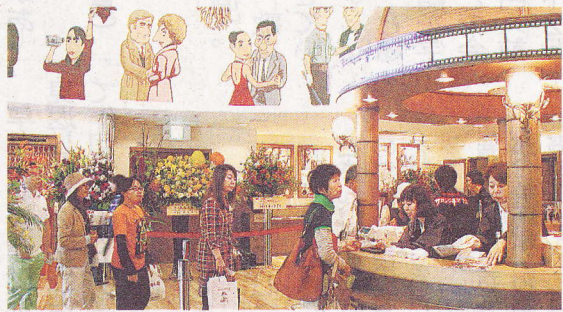
2月には、耳が聞こえない作曲家として「交響曲第1番 H I R O S H I M A」を発表していた広島市佐伯区出身の佐村河内守の作曲家偽装問題が発覚し、衝撃が走った。4月には広島音楽高(西区)が来年度以降の生徒を募集しないことが明らかにになった。

8月に発生した土砂災害の復興を支援する動きは力強かった。広響やソロデビュー20周年となる東区出身のシンガー・ソングライター

1奥田民生は会場でたる募金を呼び掛けた。「ヒロシマと音楽」委員会は、被爆2年後に市内で開かれた「メサイア」の演奏会に光を当て、全5回の「音の記憶」シリーズを締めくくった。被爆地から平和の歌声を響かせる「第九ひろしま」も30回の節目を迎えた。

全国的に単館系の映画館

映画・テレビ



移転オープンし、初日から大勢の映画ファンでにぎわうサロンシネマ(9月20日、広島市中区)

舞台

劇団四季は、ミュージカル「ジーザス・クライスト11スパーズ」エルサルレムバージョンを10年ぶりに広島で公演。児童に演劇の感動を届ける「こころの劇場」やファミリーミュージカル「ふたりのロッテ」などを展開した。

ひろしまオペラハウスは、作者ビゼーが本来描こうとしたオペラ「カルメン」の再現に挑戦。福山市のリーデンドローズは開館20周年事業で地元が舞台の小説を原作にしたオペラ「ハブテトル ハブテトラ」を披露するなど意欲的な舞台も相次いだ。

広島市南区の清水劇場の支配人として、広島に大衆演劇を根付かせた高田博さんは惜しまれながら10月で引退した。